

2023年2月

課題本 『夢見る帝国図書館』

中島 京子/著 文藝春秋 2019年

◆◆◆2月の読書会から

今月の読書会は、参加者の感想文からさらに読書を深める「読書会二次会」も盛り上がりました。先月の課題本『少年と犬』の感想文からの続き読みです。

『少年と犬』に登場する人物は一樣に「多門」になぐさめられていきました。しかし、そのことを気持ちよく感じるが、それでいいのだろうかと疑問も起きてきます。“気持ちのよさという罪”…それは、何なのか。作家が書き表せていないことを読者として深読みしていく(意味づけていく)こんな読書会もあります。どの本でもできるわけではありませんが、じっくり読み続ける読書会もあっていいのではとの声もありました。

そして、一次会の『夢見る帝国図書館』では、今月の当番さんからは上野界限の地図が用意されていました。この本は、二つの物語を合わせた形で構成されています。中心人物「喜和子さん」の物語と帝国図書館の変容が語られています。作者である中島京子さんの”図書館“に対する思いも感じられました。

二つの物語が絡み合って展開され、「夢見る」のは誰？と問いかけながら、「図書館」のあり様にも話が展開されました。感想文を読むのがまた一つ愉しくなりました。

(文責:世話係)

読書会を終えて

吉川五百枝

この本の感想を言語化して書き綴るのは2度目です。呉市の読書会「一葉の会 検索」の課題本だったので、今回、2年半ぶりに2度目を書く事になりました。課題本になると時々こういう経験をします。同じ本を2度読むこと。それは、強く残って居る印象にまた出会う快感と、見過ごしたことに気付いて揺蕩う時間を得ること。

本によっては、その後も内容を考え続けていたり、他の本で同じこだわりに出会って目が覚めたり、など記憶の中に畳み込んでいますが、記憶力が乏しいので、畳んだことも殆ど忘れず。

それでも『夢見る帝国図書館』がパツと蘇るのは、この表紙のインパクトの強さと、日本の近代図書館の歴史が書かれていたことによります。

表紙が Booknook、つまり本棚に並んだ本たちの間に、東京の下町らしいジオラマ(立体模型)を組み込んだ monde さんの作品である事は、大変な刺激だったのです。その後、どこかで、このようなジオラマを組み込んだ作品展のコーナーに立ち寄りました。小さなコーナーで通り過ぎるような場所でしたが、この本に出会って居たおかげで、見過ごしてなるものか、

と思う存分眺めました。高価な値札に、さもありませんと納得しましたが、手が出せなかったのはもちろんのことです。

この本の内容は二つの物語を絡み合わせるスタイルを取っていて、一つは、かなり擬人化された帝国図書館の変容の描写を25に分けた物語と、「喜和子さん」という中心人物を立てて話を進めるもう一つの物語とで成り立っています。

福沢諭吉が持ち帰った「ビブリオテーキ」という西洋語に驚く文部省官吏が物語の幕開けを務めますが、書籍への思いの熱さは、突然西洋から押し寄せたことではなく、日本にもありました。ただ、住民のための公共図書館という概念が、西欧に比べれば、はるかに遅れていたのです。ましてや、性差なく使えるようになるのは戦後になってからのことでした。

「図書館」という名称は、1897年に生まれた新しい言葉ですが、「図書館的なもの」は、日本にも奈良時代からあったそうです。最初の記録は、8世紀の貴族の私邸にあった「芸亭」と言われますが、空海が開いた庶民のための学問所「綜芸種智院」が私の記憶では鮮明です。それ以後、文庫、書庫、経蔵、図書寮、書籍館などの名前が浮かんできますが、私邸、神社、寺院、戦国大名の庇護した学問所などであって、どれも限られた人々だけが使えるものです。現代の図書館の様相とは全く違っていました。

鎌倉時代に、常陸の地に滞在しておられた親鸞聖人が、著述のために鹿島神宮の書庫(?)に通われたという故事も聞きかじっていて、図書館が、『ビブリオテーキ』の刺激によって生まれたことは、長い間閉じ込めていた図書への期待や愛情が一気に噴出したことだと小気味よく感じます。それが国立の「帝国図書館」(1897年)の誕生となったわけで、書籍を大事に思う歴史は続いていました。東京に先駆けて、京都にも、1872年に福沢諭吉などの提言で「京都集書院」がうまれています。「図書館」誕生の胎動は1000年以上も続いていたのだとあらためて思います。

そして今、作者が24番目の記述で筆を置いた、第2次大戦後の日本の公共図書館のあり方が、深刻な紛争の世界情勢の中で問われています。「人間の知る自由」の問題です。戦争への道を走り始めた政治の方向は、人々の「知る権利」の抑圧です。意図的なフェイクの情報戦、都合の悪い記録の破棄、言論活動の監視、それらは世界中に渦巻いている精神への暴力ですが、日本だけは無関係とは言えません。

図書館が掲げる「知る権利」の保障は、「図書館の自由」(「図書館の自由に関する宣言」)が事実上あって初めて成り立つ事でしょう。作者が、この作品の最後に記した〈真理がわれらを自由にする〉という文章は、国立国会図書館法の前文にあって、作者と一緒に立ち止まって考えさせられる言葉です。あなたの「真理」は何か、と。

帝国図書館の物語に絡むように流れるもう一つの物語。これぞ小説技法だと言わんばかりに時系列を乱し、東京上野界隈の細かな地名を活用し、宮崎県まで含ませた別世界に仕立てています。この作品構造を少し遠くから見ると、まるでこの作品全体が、Booknook アートの小説版であるかのような気がするのです。

25巻の帝国図書館物語の間に、LEDに照らされた精巧なジオラマが嵌め込まれ、両者で一つの物語世界を造っているのだと想像します。

ジオラマの照明が点灯されると、小説家志望の「わたし」が出会った「喜和子さん」が登場します。主人公とは言っても、長いつきあいの恋人にさえ「ぼくは、きわちゃんのこと、ちょっと

わからないところがあったよ。」と言わせているのですから、解らないところが多く、引っ張られて読まされる読者には、簡単には掴めない構成です。

建物としての帝国図書館は、7, 8 歳の主人公「喜和子さん」が、二人の復員軍人とバラックで生活する背景となります。1945 年東京大空襲を受け戦災都市となってしまった東京は、何でも呑み込む広さがあったのでしょうか。なぜか一人で東京に居た「喜和子さん」には、このバラックでの生活が大切な自分の子ども時代でした。そして、彼女の人の縁の中心でもあると思います。

母親は宮崎で再婚。連れ子にしてもらえなかった「喜和子さん」は 3 年ほど在所不明です。この 3 年が、後に孫から「喜和さんの黒歴史」と呼ばれる時期で、東京でバラック暮らしをしていた時期になります。「喜和子さん」は父の部下と結婚。娘(祐子)の誕生。娘から離れてまた東京へ。50 歳頃には東京湯島の辺りに住んで、恋人や、同宿の下宿人、ホームレス彼女などとの付き合いがあり、60 歳頃に、小説家志望の「わたし」に出会う。65 歳ころ 10 歳の孫(祐子の娘 沙都)と会い、73 歳で亡くなって海に散骨してもらうまで「喜和子さん」は孫と交流します。この「沙都」も祖母同様に家出経験者です。家出は、なりたかった自分になることなのでしょうか、作者は家出を、それまでの自分を精算できる一つの方法として選んで書きました。最後を「散骨」にしたのも家出の一つにも思え、世間体や固定化に執着しない DNA の延長線と見ます。娘と孫のおそろいの“白い小石”の指輪には、母娘の和解が詰まっています。そうですが、「喜和子さん」は“白い小石”の中には居らず、「イツカ図書館デアハフ」と言った相手と、幼い姿で会っているような気がしました。

私には、二つの物語が、書棚の1段に Booknook〈ゆめみるものたちの楽園〉という世界として、収まっているのが見えるのです。

『夢見る帝国図書館』を読んで

◆ 【 TK 】

図書館の歴史と作家達の関わりそして戦後の上野界隈の復員兵と浮浪児達の物語でした。戦争が終わって自由になるのに必要な知識は図書館にあったのです。たとえば、男尊女卑とかの習わしに目覚めて生きていく人の人間模様がそれです。

聖書のヨハネ 8:32 真理を知り、真理はあなた方を自由にするでしょう。という言葉が引用されています。

真理とは宗派によって解釈が違って来るかも知れませんが、たとえば、神の知恵によって人間関係がよくなったりして以前の自分より幸せになれたら自由になったといえます。以前より自分が解放された生き方ができるようになったからです。他の意味では迷信を信じていたのに真理を知り恐れから解放されたりして自由な生き方ができるようになった人もいられるかもしれません。色々な自由がありますが、聖書の大きな自由は罪と死から自由です。人間は、どうしても死ぬ。人間はどうしても間違いをして罪をおかしてしまうという奴隷状態にありそれから自由にされて解放されるという神からの憐れみが聖書のテーマとなっています。

この小説においては戦争からの自由がテーマでしょうか？戦後に自由になって本当の自分や生活を築こうとする人々が描かれているのでしょうか。

◆【佐村蘭子】

表紙がとても印象的で、『この光の中に何が詰め込まれているのだろう』『帝国図書館って
いだけあって本の重厚さが伝わってくるな』と思わせるほど魅力的でした。また、タイトルも
「夢見る?』『誰が?誰に?』図書館が擬人化されてるのか?など、分厚い本でしたが読んで
みたいと思わせる表紙とタイトルでした。

物書きという私と喜和子さんという女性の戦争を通して新しい時代に向かって生きたいと
いう思いと帝国図書館の成り立ちと変遷を上手に絡めながら構成して描かれていることがわ
かりました。

しかし、今の私には分からないところを調べながら読み進めていくにはとても時間がかかる
ようなので、この本を購入してゆっくり、じっくり自分の本にしていきたいと思いました。とても、
魅力的な一冊だと思いました。

◆【YT】

この本は内容が二層になっていて、帝国図書館ときわこさんのお話が重なり合っていました。
読んでいくうちにそれぞれの経緯、人生が、色々な人たちと繋がっていて、徐々に関係
性が解ってきて、面白かったです。図書館の歴史も知る事ができて、勉強になりました。

◆【T】

「国立国会図書館は**真理がわれらを自由にする**という確信に立って、憲法の誓約する日
本の民主化と世界平和とに寄与することを使命として、ここに設立される」図書館法の前文

永井久一郎の働きにより明治5年東京書籍館として誕生し、その後、帝国図書館として引
き継がれたが、その歴史は、金欠の歴史であり戦争に翻弄された歴史でもあった。経費節減
のために他の建物と合併したり、戦争が始まったため計画していた工事がストップしたりした。

厳しい図書館経営の中、樋口一葉・和辻哲郎・谷崎潤一郎・菊池寛・芥川龍之介・宮本百
合子等々たくさんの作家が訪れ、帝国図書館は日本の文学界に大きな影響を与えると共に
日本が近代国家になる一端を担ったともいえる。

しかし戦争に向かっていくに従い、<図書館が思想的に良いと思われる本を選定し、文
部省に権威ある良書委員を設けてお墨付けをいただくのはどうか。>と表現の自由を自ら放
棄するような提案を図書館人がしたり、香港から本を略奪したりした。このような事の反省もあ
り、戦後の図書館法に、「**真理がわれらを自由にする**」という理念がかかげられたのだろう。

一方、喜和さんは、終戦直後迷子になり、3~4年見知らぬ二人のお兄さんと暮らしてい
た。大きいお兄さんの瓜生平吉(城内亮平)と共に帝国図書館に通い、多くの本を読んだり、
お兄さんの話を聞いたり、生き方を見たりして、自由な生き方・自分らしい生き方を自然と身
につけていった。しかし、母に引き取られてからの生活やその後の結婚生活は彼女にとって

厳しいものであった。旧態依然とした家族制度、女性蔑視、自由に本を読めない生活・・・そのことを作者は、<幼いころに豊かな内面生活を培った喜和子さんは、結婚で直面した現実、途方もない違和感を抱えざるを得なかった。>と述べている。

喜和子さんがお母さんに引き取られた後、一度だけ瓜生平吉から葉書が届いた。数字で書かれている謎々の葉書だ。大きいお兄さんのユーモアかもしれないし、書かれていることが親に判ったら渡してもらえないかもと考えて謎々にしたのかもしれない、二人だけに判る秘密の楽しい暗号だったのかもしれないが、きっと喜和子さんにはすぐに分かったと思う。現実の生活に戸惑っていた喜和子さんにとって、生きる勇気になり生活の目標ともなった葉書だった。謎を解いた葉書には、「いつか図書館で会おう。」と書いてあった。

結婚したが、娘祐子の大学進学を機に家を出て大好きな上野に帰り一人で谷中で暮らした。好きな本を読みながら貧しいが自由に自分らしく生きていった喜和子さん。置いて出た娘とは、理解し合うのは難しかったが、孫の紗都に喜和子の心が引き継がれていた。紗都から娘の祐子に喜和子の気持ちが徐々に伝わっていくんじゃないかな。分かり合えないままでは辛いから。

◆【 N2 】

本棚に並んだ洋書の間、電球色に染まる細い路地に引き寄せられるように、表紙をめくると美しいメスの黒豹が 題字の「夢見る帝国図書館」と共に描かれている。そして次の頁の明るい日差しの上野公園の噴水の見えるベンチから物語は始まる。

この小説は前半の喜和子さんが生きている部分と、後半の喜和子さんが亡くなった後徐々に彼女の来し方が解き明かされる部分からなっている。帝国図書館の成り立ちを基に、設立に奔走した役人達や、そこに通った文豪、図書館利用者と喜和子さんの物語が重なり合いながら、まるで林を見ているように、物語に深い奥行きが見えてくる。

明治時代一刻も早く西洋に近代国家と認めもらうために、帝国図書館を作ることに奔走した役人達の様子、そして図書館自身が主人公として樋口一葉に恋をし、カンパネラとジョバンニの別れを見、その他帝国図書館利用者全員を眺めている。眺められた人達も生き生きと喋り今もまだ生きているような錯覚を覚えるのも面白い。戦後の上野で喜和子さんが二人の復員兵と暮らした時代、そして現代、喜和子さんの周りに集まる人々、古尾野先生、谷永雄之助くん、古書店の店主、孫娘、実の娘が登場する。

喜和子さんが母親の再婚時に親戚宅に置き去りにされ、その居心地が悪く三、四歳で戦後の上野へ家出してきてしまった事や、婚家での居住まいの悪さにいたたまれず娘を置いて上京した事、瓜生平吉の「イツカ図書館デアハフ」のなぞなぞのはがきを本の間に挟んで亡くなるまで大切に持っていた事を読むと胸が一杯になってしまった。宮崎の暮らしも幸せではなく、上野での大きい兄さんと小さい兄さんとの暮らしだけが本当に幸せなときだったのだろう。暗渠に居続ければ壁に押しつぶされるか、火にあぶられて殺されるしかない。喜和子さんは宮崎での少女時代も婚家での暮らしでもさしずめ黒豹と同じような状態だったのだと思う。賢く決断力のある喜和子さんは自由を求めて檻を飛び出し上野に舞い戻った。そし

て自分で自分を育て直し個性豊かな自由な暮らしを始めた。それは「イツカ図書館デアハフ」の言葉に支えられていたにちがいない。瓜生平吉はすなわち童話作家城内亮平で「としょかんのこじ」を書いた人だと解っていたのだ。上野公園の大噴水の脇のベンチに座っていたのも「イツカ図書館デアハフ」が、実現するかもしれないと思っただけのことかもしれない。城内亮平氏がすでに亡くなっていたとしても。

「上野は昔から懐が深い、いろんな人を受け入れる。」喜和子さんも受け入れてもらえた。本がわれらを自由にする。そして

いつでも大作家が待っていてくれる場所それは図書館だと思う。

喜和子さんの書いた「みわたせば、、、」の第二章を読みたい。

城内亮平氏にも会ってみたい。

最後の場面「きわこ」で再度上野公園の明るい日差しと幸せを感じ、物語が明るく終わっている。

のが嬉しい。

◆【 K子 】

とても難しい(面白い)構成になっています。①～④まで図書館の推移が波線で囲まれて描かれています。(擬人法で)

当時の文豪がいつもいつも図書館を利用していた様子がこと細かくまるで目の当たりにするようでした。私が一番好きな件は「図書館が毎日毎日 朝から晩まで居る粗末な着物を着た樋口奈津(一葉)に恋をした」と書いているのです。この①～④までの間に この本の主人公である「喜和子」さんの生涯がちりばめられています。「婚家での生きづらさ」娘が成長してから家を出ます。(ここでおかれた娘との確執発生から孫娘にまで繋がります) 自由人(?)になった主人公は自分の心に素直に正直に生きていきます。この間色々な人たちと拘り(舞台が上野であったことも要因のひとつかも知れません)例えば ホームレスの人・大学の先生＝(愛人になります)

性別にとらわれない人その他多くの個性的な人々に交りあいます。

図書館の歴史＝喜和子さんの人格形成。作者に投げかけられたのは図書館の役割・役目・大切さですかネ！

表紙にもひきつけられました。

◆【 MM 】

“物語”と“登場人物の「わたし」が作る物語”が交互に出てくる小説。どちらにも入り込めず、集中することが難しかったので物語と「わたし」が作った物語、それぞれを分けて読んだ。

物語を読んで感じたのは、喜和子さんの幼少期や宮崎に来る前とその後、どれが本当でどれが創作なんだろう・・・と思った。はっきりとしていないところが良くもあり知りたくもなったりした。作者(中島京子)は境目を曖昧に描くのが上手だ。『としょかんのこじ』という絵本が出てくるが、この絵本が本当にあると思って読みたいと検索したほどだ。

喜和子の辛い記憶は忘れられたのかすり替えられたのか。読むたびに印象が変わる本になりそうだ、とも感じた。登場人物もたくさん出てくるが喜和子はどこかつかみどころのない人で、他の人との交流の中でもすべては見せない、全貌がつかめない、という印象が残った。かと言って自分を作ったり何かになりすます、ということでもなくうまく言葉できっちり言い表せない、読んでいて不思議な気持ちになった。

作中の「わたしが」作る物語は、帝国図書館の歴史が詳しく書かれ、史実とフィクションがこれまたうまいこと混ざり合って読んでいて楽しかった。わたしが喜和子さんが生きている間に知ったこと、死後に知ったこと、それに喜和子さんへのプレゼントのようなエピソード詰め込んで本の中の『夢見る帝国図書館』ができた。

物語と作中に紡がれる物語が交互に出てくる構成はどんな意味があるのだろうか。「わたし」が作った物語がここまでできたときにはこんなことがあった、ということなのだろうか？今までも時系列が前後する小説が課題本だったことはあったが、今回はあったこと、書いたものを順番に並べたものかしら、と感じた。時系列を混ぜたり小説の中に小説を混ぜたり、いろんな手法がまだまだあるのだなあと感じた。